

利用者の人権と家族の人権

わたしたちがよく現場で直面するのは介護を受ける高齢者の思いと家族の思いに齟齬が生まれることです。

たとえば認知症の高齢者は過去にできていたことができなくなり、その結果家族の手を煩わせることもあります。

そうするとそれが家族の困惑から「もう家で生活するのは無理！」と高齢者を施設に入所させようとする家族もいらっしゃいます。

ちょっと待ってください。

認知症を患ってもみなさん大人としての意思をお持ちです。

それなのにご本人の意思を確認する努力と工夫なしに高齢者を施設へと移動させるのは人権侵害です。

かといって、実際に介護に「苦労」をされている家族の人権も擁護されるべきものです。

ならば支援者であるわたしたちは何をなすべきでしょう？

要介護高齢者本人と家族の思いの違いがあるなかでできること、それは話し合いの場を設けることです。

家族にもその意味をお伝えし、完全な合意は得られなくとも双方の歩み寄る一致点を見いだすことです。

要介護高齢者だからといって、ご本人の意思を無視してその人の人生を決めるべきではありません。

ともすればわたしたちは強きものの「大きな声だけ」に動かされがちです。

でもそれは強者の側の利益擁護ではあっても、弱者の思いには寄り添っていないのではありませんか？

わたしたちは家族の思いも要介護高齢者の思いも等しく理解しなければなりません。

それは福祉事業を営む者の守らねばならぬ最低限度のモラルです。

本の紹介



道具を使えば介護はもっとラクになる！
親を見守り、自立を支える道具とアイデアを紹介

★ こんな方にオススメ ★

- ☐ 高齢の親に元気でいてもらうためにやるべきことが知りたい
- ☐ 自分が外出中の親の様子が心配。安心できるツールが知りたい
- ☐ 離れて暮らしているのに、災害時や体調急変時に対応できない
- ☐ 介護が始まった。福祉用具を選ぶときのポイントが知りたい
- ☐ 時間やお金、体への負担が大きいので改善したい

ISBN978-7666-6

C2036 定価 1600 円+税

株式会社翔泳社

この本を読んで強く感じたのは、「離れて暮らす」という現代的な課題に対して、介護を「負担」ではなく「支え合い」として捉え直す視点を与えてくれる点です。親の生活を遠隔で見守る仕組みや工夫が紹介されており、技術やサービスをうまく活用することで、介護者自身の心の余裕を生み出せることに気づかされました。特に、日々の小さな安心が積み重なることで、親子双方の暮らしがより穏やかになるという考え方は印象的でした。従来の「そばにいないければ介護できない」という固定観念をやわらげ、距離があっても寄り添える方法を提示している点に希望を感じます。

また、介護者が孤立せず、社会や地域のネットワークを活用する重要性も説かれており、読者に「一人で抱え込まなくていい」というメッセージを届けているように思いました。介護をする側の心の負担を軽くしつつ、親の尊厳を守るための工夫が具体的に示されていて、実践的でありながら温かみのある内容でした。全体を通じて、介護を「楽にする」ことは単なる効率化ではなく、親子の関係をより良くするための知恵なのだと感じました。

きょうと福祉倶楽部ホームページ

有限会社 おとくに福祉研究所

きょうと福祉倶楽部

〒617-0824

長岡京市天神4丁目7-12 ハイツ東台101号

TEL 075-958-2560

FAX 075-957-2808

E-mail info@fukushi-club.com

